

地方諸藩に見る能役者の活動

萩藩・岩国藩の江戸初期演能記録を中心に

FUNCTION OF NOH PERFORMERS IN RURAL CLANS

With particular reference to the records of Noh performances
of the Iwakuni and Hagi Clans in the early Edo period.

樹下文隆*

In the Edo period, Noh flourished as the official ceremonial theater of the Bakufu, and many Noh performers served the Bakufu and various Daimyo. From the Muromachi period Noh was incorporated into the opening chants of Bakufu New Year ceremonies, theaters and banquets. Since many of the Daimyo modelled their ceremonies on those of the Bakufu, they appointed actors or trained their own retainers to perform. This continued even under the Tokugawa political regime, and the actors who served the Daimyo included not only specialized performers connected to the four principal troupes and from minor sarugaku troupes, but also pages who were appointed after learning Noh with the children of their retainer.

In the beginning, there may not have been any clear distinction between professional actors and actors from the samurai class. However, according to the regulations of the Noh actors from the *sarugaku-hatto* troupe from

*KINOSHITA Fumitaka 国文学研究資料館助教授。研究分野は能楽を中心とする中世文学。大阪市立大学大学院文学研究科修了。論文に「〈舍利〉と〈韋駄天〉」(『藝能史研究』105号)「〈遊行柳〉の構想」(『能-研究と評論-』16号)などがある。

1668 and 1683, professional actors were forbidden from wearing *katana* under their obi. Thus strict distinctions developed between samurai and professional actors, and in each clan Noh came to be, in principle, a hereditary and professional vocation. Edo period Noh reached its zenith under the fifth shogun Tokugawa Tsunayoshi. Tsunayoshi's personal enthusiasm for Noh can be regarded as the main reason, but at the same time, we should also consider the importance of the many Noh actors serving the various Daimyo.

In this paper I will consider these ideas based on the records of the Hagi Moori clan and the Iwakuni Kikkawa clan, mentioning several early Edo Hagi actors as an introduction to one aspect of early Edo Noh performers. In addition, I would like to examine their activities with examples of the independent training of Noh performers by the Iwakuni and consider the extent of the popularization of Noh theater in the rural clans prior to the golden age of Noh under Tsunayoshi.

文学史上、能は、主要な作品が成立した室町時代の文学に属します。ただし、能楽は、大幅な変貌を遂げつつも現在も上演され続けている芸能であります。したがって、近代に始まる多面的な能楽研究では、当初から江戸時代や明治時代も研究の対象とされてきました。しかし、江戸時代の能楽は、史料の膨大なこともあり、解明された部分は氷山の一角にすぎないといっても過言ではありません。近年の能楽研究の現状から見ても、江戸5座の制度が確立していく江戸時代初期の能楽は、特に重要なテーマであります。これからお話する江戸時代初期の地方の能役者の実態についての一例も、要旨に触れましたように、能役者の世襲・専業化、綱吉時代の能楽繁栄期以前の地方能楽の状況など、能楽史上重要な問題を含んでいます。

戦国大名の雄である毛利家は、大内文化の名声で知られる先行する西国大名

の大内家の影響もあり、当主の毛利元就を初め能楽を嗜む家臣も多く、能役者も召し抱えており、能楽愛好の度合いは高かったはずですが、江戸初期の演能記録がほとんど見つかっていません。それで、関ヶ原合戦以後の大幅な所領の縮小によって、能役者を抱えたり能楽を楽しんだりする経済的な余裕がなかったと考えられていました。しかし、上演記録のないのは、將軍御成りに代表されるような晴の場が、江戸初期の毛利家には与えられなかったため、江戸や上方を中心とする記録に残らなかっただけということに尽きましよう。山口県文書館にある毛利家文庫の膨大な藩政史料をひもときますと、江戸屋敷においても5座の役者と呼んで能を行っていたことが分かります。万治3年、第2代藩主綱広が義兄の松平越前守光通を招いた際には、5座の大夫である観世大夫や喜多十大夫の演能が見られます。江戸屋敷での謡初には、金春大夫の別家大夫である金春八左衛門などがたびたび出勤していたようです。またワキ方宝生流の流祖春藤権七は、萩藩からも禄を得ておりましたし、大鼓葛野流の流祖葛野九郎兵衛は、その手紙の中で毛利家に恩のあることを述べています。毛利家とその家臣である吉川家は、重要文化財を含む多くの近世初期の謡本や能楽伝書をかつて所蔵しておりました。つまり、毛利家は、江戸時代初期においても一貫して能楽愛好の気風を持っていたと言うべきでありましよう。

毛利家は、戦国時代に石山本願寺と同盟を結んで織田信長と対峙します。今述べました春藤や葛野は、本願寺ともかかわりの深い役者です。また本願寺の大夫だった春日と同姓の役者が毛利家にいること、毛利家の重臣宍戸玄劉が、本願寺にかかわりの深い笛森田流の流祖森田庄兵衛に笛伝書を伝授したこと、やはり重臣の桂四郎兵衛が、本願寺坊官で能役者としても名高い下間少進の弟子だったこと、一見それらは何の脈絡もない偶然のようにも思われますが、これらを総合的に考え合わせれば、毛利家と本願寺の関係の深さが背後にあるように思われます。中世末から近世初期にかけての本願寺は、芸能文化史上重要な役割をはたしております。その意味でも、毛利家の能楽は能楽史研究上無視できない存在であると考えます。

以下、萩藩・岩国藩の史料に基づいてお話しますが、その前に両藩の能楽記録についての先行する業績にふれておきます。

竹本幹夫氏

「由良家蔵能楽関係文書目録」(『能楽研究』7～8号 1982～83・3)

「毛利藩能役者譜録小考」(『日本古典文学会々報』92号 1982・7)

「由良家蔵能楽関係文書解説」(『能楽研究』9号 1984・3)

「江戸時代諸藩における能役者の身分」(『国文学研究』108集 1992・10)

信多純一氏

「大阪の芸能と地方への伝播(続) - 岩国藩日記記事を中心に -」(『大阪の都市文化とその産業基盤 共同研究論集2』1986 大阪大学、所収)

桂芳樹氏編

『岩邑年代記』(1984～ 岩国徴古館)

『御用所日記抄』(1980～81 岩国徴古館)

拙稿

「寛文期の萩藩能役者 - 一つの演能記録から」(『国文学研究資料館紀要』21号 1995・3)

「江戸初期岩国能楽記録稿(一)」(『調査研究報告』16号 1995・3)

竹本幹夫氏は、伝書調査から萩藩の笛役者由良家の歴代を研究され、また、能役者の身分に着目して、能役者が次第に家元制度にからめ取られて行く例として、譜録等をもとに萩藩の能役者の概略を示されました。しかしながら、主として依拠された史料である譜録が後代の編纂物であることから、江戸初期の萩藩能楽についてはほとんど言及されておりません。信多純一氏は、『岩邑年代記』を手掛かりに、岩国徴古館に残る膨大な日記類に芸能記録の多量に含まれることを紹介されました。『岩邑年代記』は断続的に翻刻刊行されております。日記類のうち寛文9年から始まる『御用所日記』は、5センチ程度の厚みの本2冊で1年分、嘉永6年までで450冊に及ぶ大部なもので、度々の洪水で被害を受けたものを後に写し直したため、難読箇所や空欄が多くあります。その抄

本が現在延宝9年まで刊行されており、手掛かりとして便利です。

竹本氏が紹介された由良家の2代目にあたる村尾半右衛門については、演能記録がまったく見つかりませんでした。私は岩国の能楽記録を調査する中で村尾半右衛門の記録を見いだしました。しかもそれは相当な量であり、また興味深い記事も含まれております。その一部については、すでに「江戸初期岩国能楽記録稿(一)」として紹介済ですが、今回はその意義についても考察を加え、記録に登場する他の能役者についてもふれていきます。

毛利家には戦国時代より笛の名人がいました。宍戸伯耆守善兵衛と言ひ、毛利家の重臣です。先ほど名前を挙げました宍戸玄劉のことです。宍戸玄劉は、牛尾玄笛という笛役者から千野流の笛伝書の一切を相伝しており、いわば家元だったのですが、専門の能役者ではありません。戦国期にはこのような女人裸足の武家があり、細川一族の幽齋や本願寺坊官だった下間少進などは、その代表格と申せましょう。宍戸もその類であり、同じく毛利家臣である由良瀬兵衛という人物に芸事一切を伝授しました。由良瀬兵衛は、後に村尾長左衛門意庵、また宗齋と名のります。村尾長左衛門から伝書の一切を受け継いだのが、ここで取り上げる村尾半右衛門です。村尾半右衛門は、初め萩野権兵衛、次に生田勝右衛門と名のります。村尾半右衛門は伝書の整理を積極的に手掛けたようで、現存する由良家伝書のほとんどに村尾半右衛門の識語があります。竹本幹夫氏は、村尾半右衛門について由良家の譜録により、最初村尾長左衛門の養子となったが、長左衛門に実子ができたので125石を賜って別家を立て、後に生田勝右衛門と名のったとされています。しかし、寛永12~13年頃の分限帳(毛利家文庫52・18・1)を見れば、生田勝右衛門は江戸詰の7人扶持切米支給50石で、125石とはかなりの開きがあります。ちなみに300石の村尾宗齋が、村尾長左衛門、つまり半右衛門の養父です。また128石4斗の齋藤六左衛門は、室町時代から戦国時代にかけて活躍し、その後の記録が一切知られていなかった寅菊大夫の子孫であります。このことについては、「寛文期の能役者」と題した拙稿に論じましたので、ここでは省きますが、齋藤が専門能役者の出で早くに毛利

家臣団に加えられた事実だけ指摘しておきます。この寛永分限帳には、諸芸者衆という項目が初めて立てられます。そこには20人の役者が記されています。

野田勘兵衛・野田小左衛門・石川勝兵衛・小倉忠左衛門・吉賀宇右衛門・
榑崎権左衛門・池田二郎右衛門・松野長右衛門・春日八右衛門・春日権之
介・井上半兵衛・江津石見守・高畠山三郎・細野伝兵衛・後藤長兵衛・指
田惣右衛門・中村神兵衛・小嶋玄斎・金田勝左衛門・藤井三郎左衛門

野田姓の2名・石川・小倉・春日姓の2名・井上・藤井は、寛文年間の分限帳にも出ており、吉賀・池田・松野・高畠は、同姓の役者が載っているのもその祖先と想像できますが、それ以外は未詳です。先に述べた三人がこの集団と別扱いであることは注意すべきでしょう。村尾半右衛門はまた、寛永6年分限帳では、萩野権兵衛の名で御小姓として7人扶持で載っております。寛文年間の分限帳にいたって村尾半右衛門の名で125石となり、寛文5年以降は大組に属しています。村尾が実際にどのような身分の変遷を辿ったか、毛利家の身分制度自体が少々複雑で、毛利家臣団のことも調べなければならないのですが、分限帳をたよりに考えますと、村尾は小姓で召し出され、江戸詰として仕え、後に能役者の扱いを受けたが、寛文5年以後は大組と称される通常の軍団に組み込まれたのでしょうか。その時点で、おそらく彼は公式には能役者として扱われなくなったと思われるのです。今までに見だし得た、萩における村尾半右衛門の演能記録は、次に挙げた万治元年10月3日家中振舞能のみです。

翁 (シテ) (春日) 八右衛門 式三番 (井上) 正兵衛

高砂 (シテ) (春日) 八右衛門 (ワキ) (斎藤) 六左衛門 笛 (高村) 権之助

小(鼓) (豊田) 又右衛門 大(鼓) (木村) 九郎左衛門 太(鼓) (藤井) 三郎左衛門

すゑひろこり (シテ) (井上) 正兵衛

田村 (シテ) (鍵屋) 藤五郎 (ワキ) (日吉) 平兵衛 笛 (周田) 七兵衛

小(鼓) (山崎) 次郎四郎 大(鼓) (松岡) 彦右衛門

うつほ猿 (シテ) (春日) 五郎左衛門

熊野 (シテ) (春日) 八右衛門 (ワキ) (石寺) 徳兵衛 笛 茂右衛門

小(鼓) (横山) 半兵衛 大(鼓) (木村) 九郎左衛門

つうゑん (シテ) (井上) 正兵衛

張良 (シテ) (春日) 八右衛門 (ワキ) (春藤) 権七 笛 (高村) 権之助

小(鼓) (山崎) 次郎四郎 大(鼓) (小倉) 忠左衛門 太(鼓) (野田) 弥一郎

つりきつね (シテ) (井上) 正兵衛

船弁慶 (シテ) (春日) 八右衛門 (ワキ) (斎藤) 六左衛門 笛 (岸田) 忠右衛門

小(鼓) (豊田) 又右衛門 大(鼓) (野田) 勘兵衛 太(鼓) (松野) 三左衛門

米市 (シテ) (春日) 五郎左衛門

藤栄 (シテ) (春日) 八右衛門 (ワキ) (春藤) 権七 笛 (村尾) 半右衛門

小(鼓) (横山) 半兵衛 大(鼓) (小倉) 忠左衛門 太(鼓) (藤井) 三郎左衛門

なかみつ (シテ) (山本) 甚五兵衛

羅生門 (シテ) (春日) 八右衛門 (ワキ) (春藤) 権七 笛 (岸田) 忠右衛門

小(鼓) (豊田) 又右衛門 大(鼓) (小倉) 忠左衛門 太(鼓) (松野) 三左衛門

呉服 (シテ) (春日) 八右衛門 (ワキ) (高島) 九郎右衛門 笛 (周田) 七兵衛

小(鼓) (豊田) 又右衛門 大(鼓) 長蔵 太(鼓) (野田) 弥一郎

この番組は、山口県文書館毛利家文庫に「大記録」と称して収められている古い記録類の一つ(毛利家文庫55・3・131の50)に載っています。趣旨は明示されておりませんが、この年は藩主綱廣が結婚した年なので、その祝の一環かも知れません。役者のうち、張良・藤永・羅生門のワキ春藤権七、田村のワキの日吉平兵衛、熊野のワキの石寺徳兵衛は、幕府5座のうち宝生座の役者です。先にもふれましたように、春藤権七は萩藩からも禄をもらっており、はるばる弟子たちをつれて江戸から出勤したのです。田村のシテを演じた鍵屋藤五郎も参勤組ですが、どこの役者か未調査です。また熊野の笛の茂右衛門、呉服の大鼓長蔵は、萩藩役者と思われますが不明です。田村・張良の小鼓山崎次郎四郎も、萩藩の役者ですが分限帳では確認できませんでした。それ以外はすべて寛文分限帳に載っています。田村以外のシテを演じたのは春日八右衛門で萩藩の大夫、高砂・船弁慶のワキは先ほど述べた斎藤六左衛門です。ここで藤永1番

にのみ村尾半右衛門が出演しています。藤永は重い曲ではありませんが、サガリハや男舞・舞グセ・羯鼓の舞事など、音曲的に面白く、笛の名人としては聞かせ所の多い曲と申せましょう。ちなみに、斎藤六左衛門が演じた翁に続く高砂のワキは名誉の役であり、船弁慶はワキの重い曲です。また春藤権七も、張良・羅生門などワキの活躍を主眼として作られた能に出ており、ことさらワキ役者に配慮した番組にも見受けられます。江戸役者の春藤への配慮だけでなく、斎藤六左衛門に対する毛利家の評価も窺うことのできる番組と言えましょう。

萩藩の能役者たちは、寛文頃には寺社組と無給通に大別されます。もともと寛文分限帳に寺社組という記載はありません。今は取り敢えず後代の呼称を流用しておきますが、厳密には組外と言うべきでしょう。寛文頃の分限帳（毛利家文庫52・38、同52・73）に載る能役者を次に示しておきます。

シテ 春日八郎兵衛（寛文7年まで八右衛門。延宝5年は竹本姓）

ワキ 斎藤六左衛門（寛文3年まで。5年以降は大組）・石川甚右衛門

笛 村尾半右衛門（寛文5年まで。7年以降は大組）・岸田忠右衛門
（延宝5年は長九郎）

小鼓 豊田又右衛門・横山半兵衛

大鼓 松岡彦右衛門（延宝5年は作二郎）・小倉忠左衛門・池田孫兵衛
（名字名替。寛文7年までは堀孫二郎）

太鼓 藤井三郎左衛門・松野三左衛門・野田弥市郎（寛文3年まで小左衛門）

狂言 春日権之助（寛文元年は五郎左衛門）・石川勝兵衛・井上庄兵衛

以上は寺社組

シテ 横山七右衛門

ワキ 春藤権七・高島九郎右衛門・嶋田太右衛門・吉賀小兵衛

笛 周田七兵衛・高村権之助

小鼓 小嶋市郎左衛門

大鼓 木村九郎左衛門・野田勘兵衛

狂言 山本清九郎

物着 久行伝左衛門

以上は無給通

寺社組のうち、すでに寛文期に大組に移った斎藤・村尾以外にも、ワキ石川・笛岸田・小鼓横山・大鼓小倉・太鼓藤井・太鼓松野・狂言石川・狂言井上は次代で大組に属しており、役者を世襲しなかったことがわかります。かれらのほとんどは藩祖秀就の時召し抱えられ、寛永16年生まれの本網の御伽役を勤めています。つまり芸で一家を立て出世したわけで、江戸初期にはそのような戦国時代の風潮が残っていたというべきでありましょう。しかし、この時期に能役を廃業できなかったものたちは、ほとんどが世襲化を余儀なくされたのです。要旨でも触れましたような、寛文・天和の猿楽法度、特に諸大名家中であっても猿楽を専業とする者の帯刀を禁じた天和の法度が出されたからです。

次に岩国の記録を見ていきましょう。日付の下に『日記』としたのが『御用所日記』、『遊覧』としたのが『御用所日記』等をもとに芸能関係記事を編集した『御遊覧事之記』という、やはり岩国徴古館蔵の1冊であります。寛文11年に村尾が岩国に参上して帰国するまでの重要な場面をピックアップします。

4月10日『日記』

河田一平罷出候様子ハ、村尾半右衛門今日當着。同道仕候而、罷上り候由にて出仕。

4月11日『日記』

村尾半右衛門罷出候。御進物、殿様江きせる一折五對。長熊様へ轡助三懸。森下左兵衛・河田一平も同心にて罷戻（下略）。

半右衛門へ奏者出相、廣間請候通、茶・たはこ出し、左候而、御意之旨、向六郎左（衛門）被申聞。追付四人方被出逢、頓而旅宿罷歸候。

進藤傳助、自萩罷戻候付、致出仕候。

西村（新六）——方罷下、今晚出仕。

村尾の参上と前後して、河田一平・森下左兵衛・進藤傳助が萩から帰還します。彼らはすべて村尾の弟子で、内弟子として修業しているのでしょう。また、京

都で修業していた小鼓の西村新六も帰国しています。村尾参上による演能に参勤するためでしょう。4月15日条をごらんください。

村尾半右衛門所江、四人衆より菅甚兵衛被遣候趣ハ、昨日進藤十左衛門一御暇之儀申出候付、其段申上候へハ、萩障入儀とも無之候ハ、今少滞留仕候様ニとの儀也。

半右衛門返事、御暇之儀申上候処、逗留仕候様ニとの儀、得其意候。隠居者故、何之故障も無御座候之間、いつ迄も御内意有之迄ハ、滞留可仕との事候。其段森（脇）六兵衛申達。

村尾半右衛門はすでに隠居の身だったようですが、当時彼は63歳でした。進藤十左衛門は、伝助の父でやはり笛役者です。村尾は岩国では必ず彼の家に滞在しており、次の記録からもわかるように岩国における村尾の高弟でした。

進藤十左衛門罷出候趣ハ、村尾立庵へ、如兼様より笛之大事之書物御奥書被遊候書物、外ニ書物五卷、又門ノ九（郎）兵衛より相傳之書も相添、何も十左衛門へ、村尾半右衛門より今度譲り申候由ニ而、持参仕、出頭衆へ入披見候事。

という記事があります。村尾立庵は、村尾意庵の意の字の下が欠落したものと思われ、村尾長左衛門意庵、つまり村尾半右衛門の養父由良瀬兵衛を指します。如兼は吉川広家、現当主広嘉の先代で、関ヶ原合戦の時に毛利家存続をかけて徳川方と交渉した人物です。村尾が毛利家内で得ていた地位の高さの想像できる記事と申せましょう。また門ノは葛野九郎兵衛のことで、彼の伝書は現在も岩国徴古館に現存します。次に5月1日『日記』の地謡・役者・番付に移ります。ここに登場するのが岩国役者のほぼすべてであります。シテはすべて村尾半右衛門です。

熊谷権八・粟屋八左衛門・熊谷六郎右衛門・朝枝半兵衛・藤田作兵衛・境三郎兵衛・今田弥兵衛・朝枝小右衛門・^{初面}森脇与三右衛門・森脇源三郎・粟屋左源太・^{初面}朝枝孫之允・原八左衛門・^{初面}足立十兵衛・亀尾左兵衛・筏六右衛門・森脇十右衛門・^中手島一（平右衛門）（以上、地謡）

大^三須吉兵衛・小^西村新六・大^品川権左衛門・大^財間佐五右衛門・大^佐々部五郎左衛門・大^三浦宗兵衛・大^いか田次郎介・大^進藤十左衛門・大^進藤傳介・大^森下左兵衛・大^河田一平・小^名島文十郎・小^水谷理右衛門・小^水谷左傳次

(以上、囃子方)

サシヨリ 杜若 笛 (河田) 一平 小 (水谷) 理右衛門 大 (品川) 権左衛門 大 (三浦) 宗兵衛

小^清より 清経 つれ (筏) 六右衛門 笛 (進藤) 十左衛門 小 (名嶋) 文十郎 大 (筏) 次郎介

一 芭蕉 ワキ (森脇) 源三郎 笛 (進藤) 傳介 小 (西村) 新六 大 (三須) 吉兵衛

サシヨリ 三輪 笛 (森下) 左兵衛 小^新六 大^次郎介 大 (佐々部) 五郎左衛門

一 花月 ワキ (亀尾) 左兵衛 笛 一平 小^利右衛門 大^権左衛門

一 源氏供養 ワキ 八左衛門 つれ (熊谷) 権八 笛 傳介 小^利右衛門 大 (財間) 佐五右衛門

一 善知鳥 ワキ 八左衛門 つれ 源三郎 笛 左兵衛 小^新六 大^吉兵衛

狂言附

鐘鑄勸進 獨狂言判九郎

しせんせき 六兵衛 八郎右衛門

ほく (発句) 盗人 判九郎 勘兵衛

那須与市 六兵衛

——ふな 六兵衛 八郎右衛門

関寺 判九郎 六兵衛 八郎右衛門

村尾半右衛門は、5月3日・7日・11日・17日・21日・23日・30日と立て続けに召し出され、舞方や笛のみならず、尺八まで披露に及んでいます。地方の中心的な能役者が、さまざまな技芸に通じていたらしいことを示した好資料と申せましょう。

5月3日『日記』

今晚、半右衛門舞形可被仰付との御事にて、暮相参上。舞方有之候。妙源院様・猶姫様——被成御出、御見物被遊候。

番付、羽衣・敦盛・軒端梅・鶴・柏崎・女郎花・龍田。

狂言、築島・柑子物語・業平餅・鳥おどし・ほんだはら・大原花見。

5月7日『遊覧』

妙源院様被為入候付、為御會尺、半右衛門被召出、於竹之間、津嶋笛・海道下り・小原木など被聞召候。長熊様被成御出座、初ル。

5月7日『日記』番付

津嶋笛・立田川邊・大原木・吉野山・まつかせ・獅子踊・大小・はんせうし・忝原くとき。右終而又、立田川邊・大原木御所望。其後、江口・百万仕舞御所望にて終。

5月11日『遊覧』

半右衛門江、今晚舞形被仰付。妙源院様・猶姫様御出、御見物被遊候。

5月11日『日記』番付

小塩・忠度・井筒・藤戸・山姥・熊坂・錦木・狸々。

狂言、今参り・狸賣・里木賣・あく坊・ゆき花・はくろふ・座頭狂言。

5月17日『遊覧』（『日記』では16日）

半右衛門被召出、小哥・鼓・一世切之尺八、被仰付。西村新六江、一丁鼓被仰付候。妙源院様被為入、竹之間にて御聴聞被成候。

5月16日『日記』番付・役者

花かたみ 一丁鼓（西村）新六 鼓（村尾）半右衛門

芦荊 役者上二同

安宅 舞半 舞鼓 鼓（進藤）十左衛門

龍田かわへ・小原木・やすた・津島・吉野山・小六・破すけ笠。以上右為役者、進藤十左衛門・同傳介・水谷里右衛門・森下左兵衛・河田一平・西村新六・友都、罷出候。

5月21日『遊覧』

半右衛門為御見舞罷出候通、被聞召上於御座間、尺八被聞召候。

5月23日『遊覧』

半右衛門今晚仕舞被仰付候。七番有之（以下略）。

東三左衛門・東八三郎義、半右衛門方江参候様こと、半右衛門より申入候付、夫々相達候事。

町方江、勘兵衛方江狂言之者差出候様、草野源兵衛江申達候事。

作物之義、米村茂右衛門・平田ノ与三右衛門、半右衛門方遣し、習ハせ候而調候事。

佐伯半三郎・粟屋平四郎〔初而〕、兩人共入候由、村尾方より様子有之二付而、兩人江申觸候事。

明晩之舞形二、ひやうしやうかへり・なかし八つかしら・二段かへしなど云習ひ事、仕候由。三須吉兵衛・西村新六・進藤十左衛門・（笹部）五郎左（衛門）など云合せ、舞座之首尾好様ニ仕候へと、四人方傳候付、其段役者共江申遣候事。

粟屋平四郎は最初地謡で後に小鼓役者となり、東三左衛門・東八三郎は、後の番組でツレを演じております。村尾半右衛門の指導は、このように立方や作り物にまで及んでおり、笛以外の役者の取り立てを依頼するなど、岩国の能に深くかかわっていたようです。

5月23日『日記』番付

——・田村・江口なかし八つ頭ひやうしやうかへり・葵上・自然居士・舟弁慶・天鼓、右七番共、番毎脇つれ歴々。

5月晦日『遊覧』

半右衛門江今晚仕舞被仰付候。暮候初ル。御座敷囲如例。御囃子七番有之。

5月晦日『日記』番付

三輪・兼平・湯屋・富士太鼓・百萬・項羽・呉服。

6月10日『日記』（『遊覧』萩座頭蘭都の項とほぼ同内容）

今晚、村尾半右衛門、自萩蘭都座頭、御裏へ被召出、尺八・琴・三美線、

被聞召候。

村尾半右衛門は、翌寛文12年にも岩国に一月程滞在し、森下左兵衛・河田一平に笛の免許を与え、また舞や尺八を披露しております。延宝4年の滞在では、木賊ゆで舞・白楽天置鼓・猩々乱・道成寺乱拍子・海士二段返し・江口三足半・関寺小町・定家・獅子など、囃子方の習い事や秘事の曲を多く演じております。言うまでもなく、これらの習い事の曲を演じるというのは、岩国の役者たちにそれを伝授するということでもありましょう。

村尾半右衛門の岩国滞在は、単なる吉川家への見舞言上ではなく、芸能の披露のみを目的としたものでもありません。彼は弟子たちに笛を指導し、伝書を相伝するとともに、小書などの習い事のある曲を、笛方に限らず伝授し、シテ方や作り物師を育成するため、岩国に滞在していたようです。つまり、村尾半右衛門は岩国藩の能楽コンサルタントとして滞在したのであり、笛の家元にとどまらず、一座の大夫と同じような存在であったと言えます。村尾半右衛門の指導により、岩国にはこれまで確認できなかったシテ方が誕生します。同様に、萩藩狂言師の春日権之助・石川勝兵衛も何度か岩国に滞在し、また岩国の弟子を萩に迎えて狂言役者を育成しておりました。勿論、萩の役者が岩国役者のすべてを育成したわけではありませんが、岩国能楽が萩藩役者の指導のもとに整備されていったことは疑うまでもありません。

寛文9年頃から始まった吉川家能役者の育成は、徳川綱吉政権の始まる延宝末年頃にはほぼ達成されていたのです。綱吉時代の狂乱的な能楽ブームの理由を、従来の研究史は將軍綱吉の性癖にのみ求めてきたように思われます。將軍の嗜好もさることながら、それに答えられるだけの下地が能界にも培われていたと言わなければならないでしょう。各藩で着々と能役者の整備がなされていたことも、能楽ブームの背景として考慮すべきではないかと私は考えています。

討議要旨

早稲田大学の竹本幹夫氏から村尾半右衛門の立場についてなどの質問があった。チューリッヒ大学のクロッペンシュテイン氏から、プログラム構成が五番立てになっていないことについての質問があり、発表者は番組一番は従来もっと短時間で上演されていたのではないかと、述べられた。